

平成二十八年年度 九州国際大学付属高等学校

国語 入学試験問題

問題用紙（1～14ページ） 試験時間（50分）

注意事項

1. 試験問題は、試験開始の合図があるまで開けないこと。
2. 試験開始後、問題冊子の印刷の不具合などに気付いた場合は手を挙げて監督者に申し出ること。
3. 解答はすべて解答用紙に記入すること。
4. 携帯電話、計算機、アラーム等の使用は禁止する。
5. 体調不良等の場合は監督者に申し出ること。
6. 問題用紙は、各自持ち帰ること。

字数制限のある問いについては、句読点も一字とします。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

人間は、もちろん、物質的な、ある基本がみだされていなければ、飢えや凍えのもとでは、豊かだとはいえない。

しかし、豊富とか豊饒ほうじょうという言葉は、生態学者が言うように、もともと生物にとって、地球的な豊かさ、つまり、なるべく多くの種が共存していること、を意味していた。多くの種が共存しているほど、それぞれの個体もまた、豊かな生き方を保障されているのが、大自然の原理原則だからである。人間の個性を大切に、とか、弱者もともに生きる、ということは、人間もまた自然の一部である限り、地球的な豊かさからみれば当然のことなのである。

木の葉が落ちてバクテリアに分解され、土壌を豊かにするように、小鳥が木の実を食べたり、土中にa タクワえたりすることによって、結果的に植林しているように、多くの種は、依存しあいながら生きています。人間もまた、相互に依存しあい、連帯しあいながら、社会の中に根を下ろし、労働や対人関係や自然との交流の中から、養分を吸収し、自分自身も社会にいくばくかのものをb カンゲンして、植物のように生の循環をくり返す。その循環の環わは、① いくつもの他者の循環の環とからみ合い連帯しあうことによって、豊かなのである。

② 企業の歯車のひとつになりきって、全人生を会社に捧げたり、家に帰りついたら、寝るだけでは、自分自身の全体としての人生はない。カネというひとつの価値だけに支配されることも豊かではない。

もともと、生きる、とは生命力の全体的な発揮であり、c カタヨった部分的な人生は豊かな人生とはいえないのである。私たちは食物、暖かさ、眠り、愛し愛されること、社会からはじき出されないこと、教育、信念、文化的活動、政治参加などのすべてに対する欲求を持つ者として、全体として生きるのである。それが自己実現である。

また私たちは、雄大な山を見たり、森の中を歩いたり、太陽の輝きが雨上りの樹々にきらめくのを見たりしたとき、また、一本の草や花、風のそよぎ、水の音、虫や鳥に出会ったときにも、心をひかれ、美しさや感動を覚えて立ちどまることがある。自然の中にいると、何ともいえない気持ちになり、永遠の自然や、命のふしぎさに、神秘的な何かをかんじたりもする。

私たちは、近代文明にまきこまれないで自然を友として生きている民族に豊かさせんぼうと羨望をかんじたりもする。それは、私たちの中にある自然と、外界の自然が、お互いに交流し、呼び合うからだろう。

比喩的な表現であるが、人間は、外の自然と共通で、外の自然と交流しあう、情緒的で、感覚的な、あるいは食欲や性欲という生命力の表現をはじめとする身体的な、いわゆる「第一の自然」とよばれるものと、科学、技術、生産などにかかわる「第二の自然」とよばれる二つの自然を持っており、そのコウサク、調和、統一によって生きている。

A、人間が、自分を全体として生きることが、第一の自然と、第二の自然を統一して、他者との共存の中で生きることが意味しており、それが豊かさ感、という充実した幸せ感をもたらすのだと考えられる。経済価値にのみつつ走ることは、人間の二つの自然の調和にそぐわないことではないだろうか。

日本には、アメニティという言葉の正確な訳語がないといわれるが、アメニティとは、あるべきところに、あるべきものがある、ということだという。B、それは、第一の自然と第二の自然が、統一され、敵対的でなく、共存をひろげていくことを意味する言葉であろう。そして日本では、技術や生産力の価値があまりに支配的になってしまっているため、「あるべきもの」もあるべきところも、わからなくなっているであろう。

二つの自然の統一、調和というとき、注意しておかなければならないことがある。科学とか、技術とか、生産などの、いわゆる第二の自然にかかわる言語表現は、数字や法則を含めて、多様で正確な表現形式を持っていると思われる。金銭については最も簡明である。C、あの山はすばらしい、とか、この絵や音楽はいい、という感覚的な、第一の自然にかんしては、私たちは、ほとんど数字や法則のような客観的な表現を持っていない。「悲しい」という一言の背後には、おそらくいろいろなものがあるのだが、悲しみが深くなればなるほど、それは「悲しい」としか言いようがなく、人びとは、それを、体験的に悟るか、あるいは感覚的身体的なものによって、相互に了解しあうことができるにすぎない。

感覚や感情を正確に客観的に表現するのが難しいだけでなく、人間には無意識の領域さえあるのだという。

私がここで問題にしたいのは、人間というものは(あるいは自然というものは)、まだ知られていない多くのものを持っている未知の存在で、ただモノとカネがあれば幸せだ、ときめつけられるほど単純なものではない、ということである。つまり、^③豊かな社会の実現は、モノの方から決められるのではなく、人間の方から決められなければならないということである。

客観的な表現はできないけれども、この第一の自然、感覚や感情や身体という、私たちの生を支えているものにも正当な座席を与えなければ、本当の豊かさ感を得られないのではないだろうか。

ここで誤解をさけるために言えば、この感覚の世界は一人一人に完全に個別的なものではない。また、捉えにくいもの、証明できないものは、存在しない、ということでもない。むしろ、あまりにもジメいなことのために、ことさらに説明する必要がないのだと思われる。

だからこそ、カネや、政治家の演説ではごまかされないものとして、この人間の、共通の感受性のある世界がある。この世界にも豊かさ感を感じさせるような技術、生産、社会のありかたこそが、本当の豊かさではないだろうか。それは地球的な豊かさとも共通する豊かさである。そして④その豊かさは、体験の中でしか感じ表現することができないからこそ、人間は、豊かな全人間的体験を体験できるような余暇——つまり自由時間を必要とする。

(暉峻 てるおか 淑子 いっこ 『豊かさとは何か』から)

問一 二重傍線部③④のカタカナを漢字で書きなさい。

問二 空欄 A B C に入るものとして、最も適当なものを次の中からそれぞれ

選び、記号で答えなさい。

ア ところが イ つまり ウ しかも エ だから

問三 本文には次の一文が抜けています。どの文の後に入りますか。直前の文の最初の五字を抜き出して答えなさい。

人生の挫折の中で、自然にふれて立ち直るきつかけをつかんだりするのも、人間そのものが自然的存在であるからだろう。

問四 次の文は、傍線部①「いくつもの他者の循環の環とからみ合い連帯しあうこと」を言い換えたものです。空欄にあてはまる語句を 1 2 は三字、 1 2 は二字で、それぞれ本文から抜き出して答えなさい。

1 2 を 1 2 し、全体として生きること。

問五 傍線部②「企業の歯車のひとつになりきって」とありますが、この表現と同じ比喩ひゆの用法が使われているものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア あなたに会った時、彼女は熊に出会った人のように驚いていた。

イ 私の耳もとで、風が秋の来たことをささやいていった。

ウ 人生は旅だ。そこから人は長い時間をかけて多くのものを学ぶ。

エ 外から帰った彼は、まるで氷みたいな冷たい手をしていた。

問六 傍線部③「豊かな社会の実現は、モノの方から決められるのではなく、人間の方から決められなければならない」とは、どういうことですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 人間の情緒や感覚、身体的なものについては表現しきれないものも多くあるので、「豊かさ」の判断は、人間誰もが持っている感覚によってなされるべきだということ。

イ 人間が情緒的、感覚的なものに形を与え、正確な表現形式を持つことで初めてモノの価値が決まるので、その上で「豊かさ」の尺度を決めるべきだということ。

ウ モノを持つことが「豊かさ」の証明だという従来の価値観は間違っているので、何を「豊かさ」とするかは、それぞれの人の感覚にゆだねられるべきだということ。

エ モノが豊富にある社会の中では、もともと人間にある感性は衰えてしまうので、「豊かさ」を得るためにはできるだけモノを持たない生活を心がけるべきだということ。

問七 傍線部④「その豊かさ」とは、どのようなものですか。当てはまるものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 技術、生産、科学を信頼することで、自分を高められる豊かさ。

イ 感覚や感情を的確に表す中で、人との関係を深められる豊かさ。

ウ いろいろな人とつながっていく中で、生を感じられる豊かさ。

エ 自由な時間を楽しむことで、自分が幸せだと感じられる豊かさ。

問八 本文の内容として、合致あいちしないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人間は情緒的で身体的な自然と、科学・生産などの自然との調和がうまくいった時に「豊かさ」を感じることができる。

イ 人間は「豊かさ」を、はっきりと表現する形式をもたないので、少しでも相手に伝わるよう努力していく必要がある。

ウ 人間は一つの価値に支配されると、自分の持つ自然のバランスを崩して、「豊かさ」からかけ離れた生き方をしてしまう。

エ 人間は人間そのものが自然的な存在だと言えるので、自然の中にいると落ち着きを感じ、「豊かさ」を感じることが多い。

二 次 の 文 章 を 読 ん で 、 後 の 問 い に 答 え な さ い 。

中学二年生の早弥、実良（松原）、春、三年生の由佳の四人は、坂口先生が指導する弓道部の部員である。公式戦を前に、実良は団体戦の三人の選手から外され、実良に代わって早弥が団体戦の選手に選ばれる。

その日も、坂口先生は実良につきっきりで指導していたが、実良の状況は変わらなかったようだ。弓と体が引き合っている。会の状態※かいで、五秒は待つのがふつうだが、なぜか一秒も待てない。

① 試合までに、実良の、松原まつばらさんの調子はよくなると思いますけど」

正直な言葉が早弥の口をついて出た。実良のことだから、すぐによくなるはずだと思う。第一自分には、荷が重すぎる。

「確かに松原さんの調子はよくなります」
「じゃあ」

その先をあせる早弥に、先生はさすとすようにゆっくりと言った。

「けれど、今日明日のうちに直るというものではないように、わたしには思えます。あせりは禁物です。② その場しのぎで無理やり調整しても、かえって悪くなってしまうこともあるのです」

「いつまで待てばいいんですか」
せきを切ったように、実良はきいた。

「公式の大会じゃなくて、練習試合には出られるんですか？」

「それはわたしにもわかりません」
「そんなあ」

「ただ、言えることは、今の状態はきつと直るといことです。今はひたすら精進しんじんしなさい。矢数やかずを重ねなさい。そして、直ったときには、あなた自身が今よりもずっと大きな人間になっているということです」

「そんなのぜんぜんわかりません」

実良は大きく首を振り、そのままがつくりと頭を落とした。先生は静かに声をかけた。

③ 「それがわかれば、精進する必要もないでしょうね」

「なんだか※ぜんもんどう 禅問答ぜんもんどうみたいだ。

「たまりかねたように実良は立ち上がった。

「もう、いい！」

ガラスが割れるように叫んで、体操服のまま道場から飛び出していった。

ガクあじさいが枯れていた。水切りをしなかったせいで。柵たなの下には、実良が残っていた荷物が一かたまりになっている。

④ 逃げ出したかったのは、わたしのほうだ。

団体戦のレギュラーになるなんて、まったく予想外だった。そりゃ、選ばれる人たちがうらやましく思う気持ちはあるけれど、自分にはそんな力はないことは、わかっている。

「はあ」

大きなため息をつく早弥に、

「これ、届けてやろう」

と、春が実良の荷物に指をさした。道具入れの中には、制服も入っているはずだから、これがなければ、明日は困るだろう。

けれど、^⑤ 早弥はすぐには返事ができなかった。実良にしてみても、自分よりもへたくそな人がレギュラーに選ばれて、きつとおもしろくないだろう。どんな顔をすればいいのだ。

「わたしが行こうか？」

案じたように言ってくれた由佳に、早弥は首を振った。先輩にそんなことをさせてはいけない。

「大丈夫です。春、行こう」

早弥は実良のバッグをつかんだ。たわなにぶら下がったマスコットが揺れるそれを、肩にかけた。ずっしりと重い。それはそのまま、早弥の肩にかかった試合へのプレッシャーのようだった。

「いくら調子が悪くても、実良が出たほうがましやないんかな」

歩きながら早弥は春にたずねてみた。^⑥ 正直な気持ちだったけど、言葉にしたらひどくみっともなく思えてくる。

自分でもうんざりするような問いを春は真剣に受け取ってくれたのか、じっと考えこんでいる。

やがて、ぼつんと言った。

「早弥は試合には出たくないんか」

質問を質問で返されて、とまどった。そんなこと考えたことがなかったのだ。入部したときから、自分が一番へたっぴだったから、三人しか出られない枠に入るとは考えたこともなかった。

「もっと自分を信じろっちゃ」

質問に答えられないで黙っていると、春はそう言った。

「信じられん」

「なんで」

「だって、わたしだよ？」

だめな自分のことはよくわかっている。

「だいたい、早弥はおびえすぎなんちゃ。おれだって、怖いんよ」

「だって、わたしが一番へたくそなんよ。春とはちがう」

春とだけじゃない。段位を持っている由佳とはもちろんのこと、才能にあふれている実良とも

自分はちがいがすぎる。

「そりゃみんなちがうやろ」

春は言った。ふと春を見る。思慮深^{しりよぶか}そうな静かな目だ。春が言うと、「ちがう」という言葉は果てしない意味を持つように思えた。

春にはきつと、いろんなことがあったにちがいない。

小学校五年生で日本の小学校に転校してきた春。学校のみんなは、びっくり仰天^{ぎやうてん}で迎えた。春の外見が、あまりにちがいがすぎていたからだ。早弥の住む地方都市において、外国人というのは珍しい。しかもアフリカ系の父を持つのだからなおさらだ。

最初、春の周りにはだれも近寄らなかつた。早弥だってそうだった。

今になってみれば、自分の肌の色の延長線上にあるにすぎないとわかる春の肌が、まったく種類のちがうもの感じられた。ちゃんと見れば、ぼつちりと澄み切^すっている目にも、野生動物のような鋭^{すまじ}さを感じた。

そのうえ、春の日本語は、あまり上手じゃなかつたから、どんな子なのかわかりづらかつた。

そのうち、春の性格の素直^{すなお}さや、頭脳^{めいせき}の明晰さ、並外れた運動能力やリズム感、そういうものが顕著^{けんちやく}になってくるにつれ、警戒感^{けいかいかん}も薄^{うす}れてきた。自然、春は人気者になった。が、同時にそのころから、心ない中傷^{ちゆうきゆう}をする人が出てきたのも事実だ。

「ちがうのはあたりまえなんよ。だけ、それぞれに持てる能力で最善をつくすしかないんよ。早弥も自分なりががんばれ。がんばって、試合で負けてもだれも責めん。少なくともおれは」

春が言った。すつと心が軽くなる。

(まはら 三桃^{みつと}『たまごを持つように』から)

(注) ※ 会——弓道の用語で、弓をいっばいに引いた状態。

※ 矢数——矢を放った回数。

※ 禅問答——お坊さんが行う、何を言っているのかよく分からない難解な問答。

問一 波線部Ⅰ～Ⅲの意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

Ⅰ 口をついて出た

- ア 慎重に言葉を選んで話すこと。
- イ つい自然と言葉を発すること。
- ウ 秘密をうっかりしゃべること。
- エ 相手を挑発するように言うこと。

Ⅱ 精進しょうじん

- ア 反省して望ましくない点を改めること。
- イ 気力を充実させて物事を順調に進めること。
- ウ 雑念を払ってそのことだけに打ち込むこと。
- エ 思い立ったことをすぐさま実行すること。

Ⅲ 中傷をする

- ア 根拠のない話をして他人を苦しめること。
- イ 事実を認めさせて強く反省をうながすこと。
- ウ 自分だけが利益を得るような嘘をつくこと。
- エ 従おうとしない相手を屈服させること。

問二 傍線部①「試合までに、実良の、松原さんの調子はよくなると思いますけど」について、早弥がこのような発言をしたのはなぜですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 試合に出ることを嬉しく思っているが、本番では実良のほうが選ばれるのではないかと不安に感じ、坂口先生に探りを入れようと思ったから。

イ 実良に対して熱心な指導をしている坂口先生の苦勞を尊いものと考え、その苦勞は報われるはずだと先生に何としてでも伝えたかったから。

ウ 自分よりも実力や才能がある実良が、日に日に以前の調子を取り戻していることがわかり、試合では実良が活躍すると確信しているから。

エ 今は調子を崩してうまくいっていない実良だが、試合までには調整がうまくいき、実力のない自分が試合に出る必要がなくなると考えたから。

問三 傍線部②「その場しのぎで無理やり調整しても、かえって悪くなってしまいうこともあるので」について、この時の状況を言い表した慣用句として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 言わぬが花
- イ 善は急げ
- ウ 急がば回れ
- エ 焼け石に水

問四 傍線部③「それがわかれば、精進する必要もないでしょうね」について、この発言からわかる坂口先生の考えとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 感情的な態度を取って行動してしまっている実良に対して、真面目に練習をすることが必要だと気付いて欲しいと思っている。
- イ 話を全く聞こうとしない実良に対して、苛立ちの気持ちを隠すことができず、素直に自分の指導に従うべきであると考えている。
- ウ 練習を全くしないで自身の実力を過信している実良に対して、あきれ果てており、弓道を甘く考えないで欲しいと思っている。
- エ 指導者にも分からないことをしつこく追求してくる実良に対して、困惑しつつも、ごまかしてこの場をやり過ごそうと考えている。

問五 傍線部④「逃げ出したかったのは、わたしのほうだ」とありますが、本文にはその理由が書かれている一文があります。その一文を本文から十五字以内で抜き出し、最初の五字を答えなさい。

問六 傍線部⑤「早弥はすぐには返事ができなかった」について、早弥のこの時の心情を説明したものとして、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分が実良に会うことは、試合に出る優越感を示すことになると心配する反面、実良が先生に取った態度は絶対に許せないと考えている。
- イ 試合に出場することにこだわる実良に強く反感を抱いている反面、実良に的確な忠告がでない自分に対して嫌悪感を感じている。
- ウ 豊かな才能がありながら、必死に練習をしていた実良を素晴らしいと思う一方で、自分が試合に出る機会は失いたくないと思っている。
- エ 困難な状況から逃げ出している実良のことを気にかける一方で、実良が自分のことをよく思っていないのではないかと不安を感じている。

問七 傍線部⑥「正直な気持ちだったけど、言葉にしたらひどくみっともなく思えてくる」について、早弥がこのような気持ちになったのはなぜですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 春が試合に向かって頑張っているにもかかわらず、自分は精神的重圧から逃れるような弱音を吐いたことが、春に対して申し訳ないと思ったから。

イ 自分の気持ちをなぐさめてくれることを期待した発言であったが、結局は春に甘えているのだと気づき、そうした自分が嫌になったから。

ウ 自分の能力が実良よりも劣っていることを改めて確認したことになり、困難に立ち向かっていけない自分の意志の弱さに我慢できなかったから。

エ 実良に強い対抗意識を持ち、実力差を無くすために懸命に努力したが、実力の差は埋まることなく、実良に対する敗北感を感じているから。

問八 傍線部⑦「春が言うと、『ちがう』という言葉は果てしない意味を持つように思えた」について、早弥がこのように感じたのはなぜですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 学校生活の中で多くの人から好奇の目で見られていた春は、他人のことなど全く気にしない態度を身につけており、常に自己中心的な考えでわがままに行動する春の発言を聞いた早弥は、強い抵抗感を感じずにはいられなかったから。

イ 春が経験してきたことを早弥は全く知らないにも関わらず、春の言葉から、春が現在に至るまでに数多くの困難を乗り越え、強い精神力を身につけてきたことが感じられるとともに、自分では考えもしなかった深い意味に気付かされたから。

ウ 自分と他者の違いについて常に考えてきた春は、同じ中学生であるにもかかわらず、人や事態に対する考えや物事の処置の仕方が合理的で、冷静に物事を捉えて発言する春の姿に、早弥は自分との違いを感じて驚きあきれてしまったから。

エ 春は外見の違いと言葉の問題で、自分と他者との相違について考える経験をしており、対人関係で苦勞してきた春の姿を身近で見ている早弥は、春の置かれた状況を理解し、春の発言にこれまでの経験が反映されている重みを感じたから。

問九 傍線部⑧「すつと心が軽くなる」について、この時の早弥の心情を説明したものととして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 団体戦の選手に思いがけず選ばれたものの、自分の実力に全く自信が持てず、先生に与えられた役割を果たすことができるかと悩んでいたが、できる限りの努力をすればいいという春の言葉により、強い重圧から解放されて気持ちが晴れて楽になっている。

イ 団体戦の選手によく選ばれたものの、自分の技術に自信が持てず、実良の代わりをつとめることができるかと心配していたが、全員が実力以上の活躍をすれば結果は現れるという春の意見に励まされ、試合に勝てるという楽観的な気持ちになっている。

ウ 待望の団体戦の選手に選ばれたものの、自分の才能に自信が持てず、どうすれば試合に勝つことができるかと悩んでいたが、自分の悩みを親身に聞いてくれた春と一緒に練習する約束をしてくれたので、決して孤独ではないのだという安心感を持っている。

エ 団体戦の選手に予期せず選ばれたものの、自分の能力に自信が持てず、仲間には期待されたことがない自分が試合で失敗すると、今まで以上に責められるのではないかと心配していたが、春がはっきりと否定してくれたので、清々すがすがしい気分になっている。

問十 本文の内容についての説明として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 後輩に対して常に思いやりの気持ちを持つ先輩の由佳に対して、早弥と春は冷たい態度で接しており、先輩の真心を全く理解しようとしていない。

イ 先生が試合の代表に早弥を選んだことに対して、早弥は納得のいかない気持ちを持っており、実良に対しては申し訳のない気持ちを持っている。

ウ 試合に出ることを不安に思い、早弥に対して部内の誰もが味方をしていない中で、春だけが早弥を勇気づけて自信を取り戻させようとしている。

エ 感情的に行動をし、試合のことなどどうでもいいと考えている実良に対して、春や早弥は何とか励ますことで、自信を取り戻させようとしている。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(漢字の読みは現代仮名づかいに直しています。)

ある所に 偷盗ちゆうとう入りたりけり。あるじおきあひて、帰らん所をうちとどめんとて、
物音に気づいて起き出して、つかまえようと思つて、

i

その道を まちまうけて、ふすまの破れ目から のぞきをりけるに、盗人、物ども少々とりて袋に入

れて、
ii 少々をとりて帰らんとするが、さげ柵のうへに鉢に灰を入れて置きたりける

を、この盗人 なにとかおもひたりけん、つかみ食ひて後、袋にとり入れたる物をば、もとのこと

くに置きて帰りけり。

待ちまうけたる事なれば、
iii 伏せてからめてけり。この盗人の振舞ひ心得がたく

組み伏せてつかまえばった。

て、その子細をたづねければ、盗人 いふやう、「我もとより 盗みの心なし。この一両日食物た

えて、術なくひだるく候ふままに、はじめて かかる心つきて、参り侍りつるなり。しかあるを

どうしようもなくひもじくなりまして、

御柵に 麦の粉やらんとおぼしき物の手にさはり候ひつるを、
iv ものほしく候ふままに

口に入れるものがほしくてなら
なかつたものですから

つかみくひて候ひつるが、はじめはあまり飢ゑたる口にて、なにの物ともおもひわかれず。

あまたたびになりて、はじめて灰にて候ひけりと知られて、そのちはたはずなりぬ。食物なら
何度もそうしているうちに、

ぬものをたべては候へども、これを腹にくひいれて候へば、もののほしさがやみて候ふなり。

v これをおもふに、この飢ゑにたへずしてこそかかる あらぬさまの心もつきて候へば、

灰をたべてもやすく なほり候ひけりとおもひ候へば、とる所のものをもとのごとくに置きて候

ふなり」といふに、あはれにもふしぎにも覚えて、かたのごとくの 形ばかりの さげ柵 をつりてかへ

し遣りにけり。「のちのちにもさ程にせんつきん時は、はばからずきたりていへ」とて、つねに
どうにもならなくなつた時は

盗人は何度も

とぶらひけり。盗人も この心あはれなり。 家のあるじのあはれみ、また優なり。
あるじのものを訪問した。 また立派である。

『古今著聞集』から

(注) ※ 偷盗——盗人。

※ さげ柵——つり柵。

※ さげ柵——盗品。

問一 二重傍線部 A ～ C を現代仮名づかいに直しなさい。

問二 傍線部 I ～ III の口語訳として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

I なにとかおもひたりけん

- ア 何の決心をしたのか
- イ 何と思い間違えたのだろうか
- ウ 何を思ったのだろうか
- エ 何が盗みたかったのか

II 麦の粉やらん

- ア 麦の粉ではないだろうか
- イ 麦の粉を与えてやろう
- ウ 麦の粉を手に入れたい
- エ 麦の粉はどこにあるのか

III はばからずきたりて

- ア 悪い心を持たずに
- イ 遠い距離でも気にせずに
- ウ 人目を避けてきて
- エ 遠慮せずにやってきて

問三 本文には、「ことごとくもとらず」という語句が抜けています。空欄 i へ

v のどこに入りますか。最も適当な箇所を選び、記号で答えなさい。

問四 傍線部①「この盗人の振舞ひ」について、具体的な内容が書かれている部分を三十五字以内で本文から抜き出し、最初の五字を答えなさい。

問五 傍線部②「なほり候ひけり」について、具体的な内容が書かれている部分を十五字以内で本文から抜き出して答えなさい。

問六 傍線部③「家のあるじのあはれみ」について、何をしたことが「あはれみ」だと言うのですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 盗人の言い分を信用し、盗人を解放するよう使用人に指示したこと。

イ 盗人を解放したうえ、盗人が盗もうとしていた物品を持ち帰らせたこと。

ウ 盗人に乱暴せず、盗人の言い分を聞いてから適切な罰を与えたこと。

エ 盗人を許したうえ、その後の暮らしが成り立つように仕事を世話したこと。

問七 波線部 a～d の「心」の中で、一つだけ内容の異なるものがあります。適当なものを選び、記号で答えなさい。

問八 本文の内容と合致しているものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 盗人は家の主人に処罰されなかったのをいいことに、その後何度もこの家から盗んだ。

イ 盗人は大した物は盗んでいないが、家の主人に待ち伏せされ捕えられてしまった。

ウ 盗人はあわてて盗みをしたために、下見の時に狙っていた物とは別の物を盗んだ。

エ 盗人はこの家での盗みには失敗したので、ほかの家を何軒も回っているといろいと盗んだ。